

# 論文の要約

## 黒須亜希子「出土木製品からみた原始集落の生業と生活」

本論文は、弥生時代・古墳時代を中心とした原始集落の生業と生活について、出土木製品への検討からその画期と展開について考察を行うものである。

第1章では「稲作と木製農耕具」と題して、主に水田を耕す道具である鋤鋤類について記述した。第2章では「木製調理具の展開」と題して、杓子・匙を中心とした調理具について、土器や遺構との関係から言及した。第3章では「衣生産と木製紡織具」として、紡織具の変遷の具体相を探った。また第4章では「集落の生活と木質資源」と題して、木製品を実際に作成する用材の獲得方法について検証した。

以下、章節ごとに概要を示す。

### 第1章 第1節 近畿における直柄鋤の展開

本章では、弥生時代以降、農耕集落の生業のひとつとなった水田耕作を担う木製農耕具を対象とする。

このうち本節では、集落の主要な生業である農耕に用いられた道具のうち、近畿地方から出土した鋤について検討を加える。木製品のなかでも一定の出土量を保つ直柄鋤（鋤身に穿孔して柄を装着する鋤）は、水田遺構の発見とともに稲作文化の伝統を示す証左として、今日でも認識されている。近畿地方の鋤鋤類の編年研究は、『木器集成』において結実し、鋤鋤類の基礎的編年の指標となった。ただし、その過程においていくつかの矛盾が生じており、解決を将来に委ねた項目も多い。

そのひとつに、狭鋤に関する問題がある。本節では主に狭鋤の特徴からその具体的な製作技法について、解明を試みる。はじめに、近畿地方のうち大阪府内の出土例について編年案を提示する。次に、広鋤と狭鋤のセット関係から、狭鋤が広鋤の再利用品であることに言及する。その上で、狭鋤の特徴とその製作工程について考察を加える。

### 第1章 第2節 「広鋤Ⅰ式」の成立

本節では、弥生時代前期に使用された直柄鋤の一種である「広鋤Ⅰ式」（本節では広鋤Ⅰ式）について検討を加える。広鋤Ⅰ式は、弥生時代前期の東九州地方から東海地方にかけて出土し、特に瀬戸内海沿岸部と近畿地方に多く報告例がある。当該地域における初期農耕の特色を知る有用な手がかりになると資料であるが、そのルーツなど、具体的な解明はあまり進んでおらず、伝播経路や使用方法など不明な点も多い。

このため本節では広鋤Ⅰ式を再定義し、これがどのように成立、展開したかを解明する。はじめに先行研究を精査し、現時点での情報を整理する。次に各地域の出土例を取り上げ、共伴する土器の年代から広鋤Ⅰ式が導入、使用された時期を特定し、その初現を探る。最後に広鋤Ⅰ式の成立過程と変遷の具体相について考察する。

### 第1章 第3節 泥除の再検討

本節では、木製農耕土木具のうち、弥生時代から古墳時代に出土する泥除と、これを装着した直柄広鋤の機能について検討を加える。

泥除は、弥生時代前期中段階以降の西日本を中心として普及した鋤の補助具である。民俗事例をふまえた先行研究から、泥水が耕作者にはね飛ぶのを防ぐための装置としてこれまで説明されてきたが、出土例と民具例との間には時代的な隔りがあること、また材質が異なる点など、その系譜を解明できてはいない。加えて装着方法が不明瞭な泥除もあり、その出現と展開、機能については十分に説明されているとは言えない状況にある。

このため本節では、泥除および広鋤を装着装置の形態から再分類し、各地の出土例を整理することにより、その組合せをパターン化する。続いて、これまで曖昧にされてきた広鋤1式と泥除1式の装着方法について、遺物の実見観察から、具体的な方法の復元を試みる。また組み合わせた両者が、どのように形態変化したのかを整理することにより、これが湿田においてどう作用したのかを考察する。

### 第1章 第4節 西日本における鋤鋤類の組成

本節では、第1節～第3節までに整理した近畿地方の出土事例とともに、西日本全域における鋤鋤類の出土例について整理し、本章のまとめとする。

近畿における木製農耕具の編年的研究は、『木器集成』によって一定の指標が示されたが、全国的に見れば近畿も一地方にすぎず、全国各地の報告例との共通性が認められる一方、必ずしも合致するわけではないことが指摘されている。つまり、近畿地方の農耕具の特徴を捉えるためには、自ずから他地域との比較研究が必要となる。

このため、まず西日本出土の資料を同一視点で概観するために機種名称を整理する。続いて地域ごとの出土例を示した上で、その組成変化の面期を明らかにした。

### 第2章 第1節 調理具の変遷

本章では、人々の生活の基本となる「衣・食・住」のうち、食生活に必要な調理具を研究対象とする。このうち本節では、木製調理具に分類される杓子と匙について、検討を加える。

弥生時代・古墳時代の食生活を推測するとき、煮炊具である甕や、盛付具である鉢などの土器に焦点があてられることは多く、研究も盛んにおこなわれている。しかし、出来上がった料理をどのようにすくいとり、口にまで運んだか、という点については、木製品を使用したと推測されている以外、特に考察されていない。木製調理具および食事具のうち、弥生時代・古墳時代に使用されたと考えられているのは、杓子と匙であるが、その形状のわかりやすさからこれまで機能論の俎上にのぼることがなかった器種である。また、装飾を施すものが含まれることから祭祀具として認識する論もある。

本節では、未成品の出土傾向から杓子・匙を調理具と位置づけ、主に近畿における出土例の分類および編年をおこない、その変遷を明らかにする。

## 第2章 第2節 容器と調理具の相関

前節において示した木製調理具の消長と、調理具の受け具である容器との組み合わせについて具体的に検証する。杓子・匙が調理具である以上、調理をおこなう本体である煮炊具や盛付具である土器との間には、なんらかの相関関係があると考えられる。そのため、杓子・匙の消長や大幅な形態変化は、組み合う容器の変化と連動する可能性が高い。この予測に基づき本節では、まとまった出土量がある斜杓子と縦杓子について詳しく考察を行った。その結果、斜杓子は甕・鉢に、縦杓子は壺と組み合うこと、また縦杓子の消滅は井戸の出現と関連する可能性を示した。

## 第3章 第1節 織機の構造と復原 —出土紡織具研究のための基礎作業—

本章では、弥生時代・古墳時代の人々が、衣服の材料となる帛布を生産するために用いた木製紡織具について検討を加える。紡織具は、糸をつむぐ紡具（製糸具）と、糸を織る織機（製織具）をあわせた呼称である。ともに人々の衣生活を担う生産用具であり、食生活や住生活とともに人間が生きていく上で不可欠な要素である。その技術を検証するためには、出土した紡織具に対して考古学的な検証を加えることが有効であるが、実際には民族学・民具学・文献史学による研究成果に依存するところが大きい。

その理由のひとつに、かつての織機がどのような形状であったのかがわからない、という点がある。出土した木製品が紡織具の一部であるかどうかは、よほど器形に特徴があるか、糸圧痕等が残るものでない限り、非常に難しいと言わざるをえない。

このため本節では、出土紡織具検討の前段階として、現存する民族具及び民俗具を参照し、弥生時代・古墳時代の紡織具の形状を探ることを試みる。両者に認められる使用痕跡に着目し、その共通性から出土部材の機能確定を行う。

## 第3章 第2節 織機の導入と展開

本節では、出土織機部材への考察に基づき、各種の織機が導入された時期とその様相を明らかにする。

始めに出土例を概観し、器種ごとにその傾向をつかむ。続いてもっとも出土例が多い組合せ式布巻具を用いて、その導入と定着の様相を考察する。

## 第3章 第3節 紡織具からみた変革と発展

本節では、第1節・第2節において検討した弥生時代～古代の出土織機部材と、紡織具からみた衣生産の画期について考察し、本章のまとめとした。

紡織具における画期は3期に認められる。その第1は縄文時代末～弥生時代前期における原始機（無機台機）の導入である。続く第2は弥生時代後期～古墳時代初頭におこった栳と総掛けの導入で、これは製糸と製織の分離を示す。最期に第3として、古墳時代後期におこった有機台織機の導入を掲げた。

#### 第4章 第1節 用材選択と木製品生産

本章では、集落における人々と木質素材との関わりに着目し、その用材の確保について検討を行う。このうち本節では、集落において木製品を製作する際の用材選択について考察した。

用材選択については、これまでも全国規模のデータベース作成が試みられており、その地域性や時代ごとの特性が指摘されている。ただし、近畿地方については個別データの提示は為されているものの、具体的な比較作業は進んでいない。このため、本節では近畿地方の各府県ごとにデータを抽出し、その比較と検証を試みた。その結果、広葉樹と針葉樹の使用割合が弥生時代後期～古墳時代初頭に転換すること、また用材傾向の変化は木製品の形状変化と密接に結びつくことを追認した。一方、近江地域は他の地域とは異なる数値を示しており、近畿一円が必ずしも同調するわけではないことを確認した。

また、用材のうち特に使用量の変化が顕著なアカガシ亜属について、その変化が何を契機として起こったのかについて考察を加えた。

#### 第4章 第2節 木製品の再利用

本節では集落内における木製品の再利用について、その具体相を検証する。集落内における木製品製作のための素材を確保する手段としては、森林で新たな木材を切り出すこと以上に、古材を再利用することが多かったと認識される。特に、新材の入手が容易ではなかった河内平野の集落においては、その傾向が高かったと推定される。

その具体相を探るため、大阪府内において貯木遺構を有する遺跡を抽出し、古材（破損品）と未成品の出土状況について検討した。その結果、古材と未成品は同じ貯木遺構から出土することを確認した。このことは、古材が新材と同じく素材として扱われていたことを示している。

本節では、この成果とともに前節において検討した用材選択の原則から、古材の再利用においてもその器種によって樹種が考慮されていたこと、また施設材として大型木製品が再利用された事例もあることを視野に入れて、木製品の製作から再利用、消滅までの過程を復元した。

#### 終章 生業・生活の変化と木製品

以上の各論をふまえた上で本章では、弥生時代・古墳時代の出土木製品の変化からその画期を見出し、各時代の遺跡・遺構との関係を考察した。

大阪府内において農耕具、紡織具、調理具が出土した遺跡を具体例として抽出し、その遺構の変遷と木製品の形状変化を関連付けた。さらに、前章までに確認した各種木製品の画期（弥生時代前期後半、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代中期～後期）について、その社会背景と木製品との相関性について言及し、本論文の総括とした。